対談：井上志保　×　小林キユウ

●撮り始めたきっかけ

事務局：今日の対談は、出品者と選考員が展覧会の前に作品の理解を深めようという主旨で行うものです。トップバッターは、井上志保さんと、選考員の小林キユウさんで、井上さんは、少年事件の現場をたどった作品を作っています。

小林：まず、この作品を撮り始める動機は、やっぱり少年と同世代ということが大きいんですか？

井上：そうなんです。私が一歳上。だからすごく近い存在なんです。

小林：今から８年前の事件ですが、そのニュースを聞いた時はかなり衝撃的でした？

井上：それまでの事件では、客観的にそういう事件があるんだなっていうぐらいだったんですけど。私が住んでいるのは大阪なので、神戸にはよく遊びに行っていたんです。

小林：じゃあ、自分の生活圏ではあったんですね。最初犯人は中年男性って思われていたけど、同じ中学生と分かって、自分と同じ目線で考え始めたって感じなんでしょうか。この写真を撮り始めたのはいつから？

井上：撮り始めたのは２００３年の５月からで、まだ２年くらい。ドキュメンタリーを撮りたいと思ってテーマを探してました。

小林：少年が社会に出てくるというニュースが直接的なきっかけですか？
実際、頭で撮ろうと思っていても、なかなか現場まで行こうと思わないから、そのへんはやっぱり何かあったのかな？

井上：事件が終わってから何年たってもこの事件だけは忘れることが出来なかったし、自分の中ではすごい大きな存在だった。新聞で読んで、次の日に行きました。

小林：その翌日って、ほとんど発作的みたいですね。その時はすでにシャボン玉を？

井上：その時はまだシャボン玉もカメラも持って行かずに、取りあえず行って、まず目で見てみようと思って。

小林：行ってみてどうでした？　自分がそれまで思っていた所とは？

井上：全然思っていたのとは違って、ほんとにうちの近所みたいな、すごい日常的で。人々もそうですし。だから反対に違和感を感じたというか。

小林：このテーマを撮るにあたって周りの反響はどうでしたか？

井上：やっぱり大学の先生も、友達も、これはやめておいたほうがいいんじゃないかって。事件が事件なんで、私までもえーっていう存在に見られました。どういう意味で、写真を撮るんだろうって。

小林：それは現場に行くこと自体も？　あの辺りではそういうことを語ることが、タブーみたいな空気があるんですか？　みんな忘れたがっているのに、なんで今さらって。

井上：はい。事件現場に家が近い友達がいて、その子にもやめたほうがいいんじゃないか、やっぱりカメラを持っていくことによって、その周辺の住民に思い出させてしまうって。カメラを持っているだけで、みんなの目つきが、なんですか、っていう感じで……。

小林：現場の住民は白い目でも、写真仲間や先生は応援してくれていたのかなと思っていたけど。このテーマを撮るのは、井上さんにとって賭けというか、かなり捨て身みたいな感じですよね。井上さんの中では、決して忘れないというか。

井上：自分の中では忘れてはならないことというのがあって。親からもすごい反対されたんですけどね。

●シャボン玉

小林：現場でシャボン玉をとばす時は、周りはどんな感じでした？

井上：それは、すごい苦情……というか、何をしているんだって、住民の方や警察にも怒られたり。やめろって言われたり、今さらどういう意味で撮っているんだって言われたり。聞いてくれる人には説明もしたりしたんですけど、駄目な時は、すみませんって言って帰る。でもまた行くんです。

小林：普通はそこでくじけちゃうと思うんですけど、それでも通い続けてたってことは、井上さんにとってあの事件は他人事ではなくて、完全に自分の中にあって、かなりの部分を占めていたんでしょうね？

井上：……そうですね。

小林：この事件のあとすごい量の報道がされていて、大人というか上の世代のジャーナリストが、１０代のこの世代はよく分からない、怖い、というような表現しかしていなかったと思うんです。まさに同世代で同じ時間を共有して生きてきた井上さんが、数年して、この事件に向かったっていうのは、今までに全くなかった視点、同じ世代が捉えた風景、っていうのをすごい新鮮に感じたんです。タブーに挑戦したということでは、ある意味でこの撮影自体が「事件」ですよね。それで、このシャボン玉っていうのはどこから？

井上：以前、水の姿みたいなのを抽象的に撮っている時があったんです。水に石けんを足すだけで、これだけの美しいものが出来るっていうので、すごくシャボン玉には不思議な力というのを感じていたので、これに使えるんじゃないかと思っていたんです。シャボン玉はきれいでもろくて、人の心とか魂みたいにも思えて。

小林：今回ドキュメンタリーの公募展なんですが、ドキュメンタリーって、非演出っていう要素が多いと思うんです。これは、シャボン玉を吹いて演出していますが、井上さんにとってドキュメンタリーってどんなものですか？

井上：ドキュメンタリー……。前回の本田犬友さんと同じ学校なんですけど、あの作品がドキュメントだというのが、私には分からない……。私もすごくいい作品だなあとは思うんですけど……。

小林：本田さんも、実際のリアルな風景があり、そこに加えて自分の作為、演出が入っています。井上さんはシャボン玉だし、本田さんはわざと人物を不自然に整列させてみたり。手法的、発想的にはすごい似ている。

井上：そうなんですか……。

事務局：現実をとらえようとした時に、そのまま撮っただけでは見えにくい世の中だから、それを見えるようにするために、演出が必要なときもある、というのが去年の選考会での結論でした。

小林：井上さんのは、シャボン玉を取ると、普通の風景っぽい写真ですよね。シャボン玉があることで、下手すると全部台無しになる危険性もあった。見る人によって賛否両論があるだろうし、ここまで強引に吹いたっていうのが新しい。現場でカメラ向けるだけでも、命が縮まりそうな空気があるのに、そこでシャボン玉を吹いた感覚が僕にはよくわからないし、逆にすごいなと思う。新たな感性かなって感じました。

●ジャーナリスティックな視線と個人的な視線

小林：井上さんが１０代から２０代になって、この事件が常に内面に何か影響を与えていたっていうようなことありましたか？　例えばこの事件があったから、こんなふうに考えるようになったとか、こんなふうに世の中見るようになった、とか。

井上：影響は大きくあるかもしれませんね。やっぱり、この事件が起きるまでは、そういう残酷な思いを持っていることとか、考えたことがなかったんですけど。自分の中にもそういった部分みたいなものもあるような……。

小林：それでも撮ろうとしたのは、やっぱり撮らなければいけない、という何かがあったのかな？　そこまで強い思いっていうのは、何がそこまでさせるの？

井上：写真撮っていくうちに、その少年の思いとか、その深い部分まで知りたいと思ったんです。その写真を撮ることによって、事件の意味を検証するためにも……。

小林：僕も事件現場を歩いてみたことがあるんですけど、現場に行っていると、犯人になった気分になるというか、乗り移ってきちゃうというか。そういう感じってやっぱりあったんですか？

井上：はい。ありました。

小林：ある意味、少年になって世界を見始めた……。少年になった井上さんが見た風景。それは、多分辛い時間だったと思うんだけど、撮り終えた時どんな感じでした？

井上：やっぱり撮ってよかったと思う。いろいろ迷いや悩みはありましたが。

小林：撮っている時間はどんな時間だったんですか、現場歩いていて。

井上：このシャボン玉を自分で飛ばせない場所もあったので、それは親についてきてもらっていたんですけど、親が言うには、なんかピリピリしてて、私じゃないって。普段と全然違うって。

小林：殺気だったオーラが走っていたみたいなことですかね。

井上：恐怖と、言いようのない悲しみと、撮らなければならないという焦りなどが……。

小林：それだけのことをして、少年に対する思いってどういう思いなんですか？　分かる部分もあったり、分かんない部分もあったり……。同じ世代としてはどうですか？

井上：事件が起きた直後は、すごく恐い存在だったんです。でもやっぱり大人になっていくうちに、他人事のように思える狂気が自分の内にも住んでいるかも知れないと……、なんとなく近くに感じたりもした……。

小林：近いっていうのは？　なんとなく分かる、みたいな感覚ですか？

井上：はい、分かる部分も。やっぱり、ふとした時に、自分にも何かを壊してしまいたいとか、そういう感情がわいてくることがあると思うんです。誰もが持っている感情というか。でもそれはすぐに消えるんですけど。

小林：そういう人間の恐い部分っていうのが、この少年によって、ふと気づかされる時があるってことなんでしょうね。

事務局：小林さんも以前に本の取材で同じ場所を歩いているんですが、彼女が見ている風景と、小林さんが見ている風景って全然違いますか？　例えば、自分だったらこういう所は撮らないとか。

小林：シャボン玉を抜きにすると、そんなに変わらないかなあ。でも、言ってみれば、どこか分からないような写真は僕は撮らなかった。例えば、井上さんの、少年の降りた階段とか、そういうのは撮らなかったですね。それは、僕が昔、新聞記者で、いわゆる新聞記者のカメラマンとかは、新聞の社会面に、こういう少年が降りた階段、みたいなのは載せないですね。タンク山の入口とか、こういう説明的な、誰が見ても分かるような場所がどうしても多かった。これは、ほんとにごく私的な風景ってことですよね。例えば、これは少年と井上さん、二人だけが知っている風景ということになる。

井上：少年を知りたいと思って、すべてを撮りたいというか……。レンズを通して、彼の心の闇、心の襞に近づいてみたかった。

小林：いわゆる現場写真ではないですよね。ジャーナリストが撮る写真じゃなくて、もっと自分の内側に取り込んだ写真というか。僕はずっと新聞でやっていて、ジャーナリスティックな写真に飽き飽きしていて、ごく個人的に現場を見てみたらどうなるんだろう、というので撮り始めたんです。それがこういう誰も気づかない、見落としてしまうところを逆に撮っているところが、事件の写真の中ではすごい新しい。日本中のどこの町ともそんなに変わらない町っていうのが分かったりしますよね。

●現場で感じる

小林：タンク山や少年の家は、どうやって見つけたんですか？　だいたい何処の現場もタクシーの運転手に聞けば分かるんですが、僕が行ったときは、１０台くらい聞いても分からないって言うんですよ。諦めかけて、夕方やっと一人知っている人がいて、辿りつけたんですけど。

井上：私は車で行ったので、ぐるぐる廻っているうちに。タンク山は高いところにあるので、すぐに目につきました。でもあそこも今は立ち入り禁止になって、柵みたいのが１年くらい前からできてしまった。だから、登るのも、人の目を気にしながら。家の方は、ものすごい時間かかった。学校のない日

は毎日のように行って。住所表示のないところが多くて、聞いても知らないって言われて。でもくじけないで、たくさんの人に聞いて、最後におじさんに教えてもらえたんです。私の車のナンバーを見ただけで、みんなの目が違いますね。

小林：部外者だってこと？　その努力が、すごいな。テーマとかじゃないんですよね、もう、自分の生き方というか、撮らずにはいられない。自己存在が、そこにかかっている、みたいな。

事務局：この公園とかは報道されてましたっけ？　こういうのは、探しづらそうですが。

小林：僕はたくさん映像を写すから新聞よりワイドショーを参考にしましたね。全部ビデオに撮っておいて。近所の人にレポートする時、レポーターは１０分くらい間を持たせないといけない、それで、背景にいろんな所を写すんですよ。あと、フリーで取材するっていうのは想像以上に大変なんですよね。なになに新聞社、なになにテレビ局って言うといいんですけど、小林って言っても、ただの怪しい人で。

井上：でも、教えてもらえないから、余計に知りたくなる。

小林：苦労して知った事実は、新鮮だし、私だけが知っているみたいな感じがある。そうすると少年との世界が、自分の中で、どんどん出来てきますよね。

井上：やっぱり少年のことで分からない部分の方が、まだまだ自分の中に大きくある。でも写真を撮っていったり、シャボン玉も吹いているうちに、けっして超えてはならない壁を少年は超えてしまった絶望と恐怖みたいなものがわかるような気がしてきました。

小林：この事件に限らず、どんな事件でも現場に一個人で行くと、容疑者というか、犯人が乗り移るみたいな感覚が、あるかもしれません。世間が共有している情報以外に、例えば、実際に現場に行くと、この階段はこんな急だったんだとか、少年の家はこんなに普通なんだみたいな、世間は知らなくて、自分とその少年だけが知っているっていう事実が、ものすごく自分の中に増えてくると、どうしても、少年と近い存在になってくる。そうすると、逆に社会が遠く見えて。普通のジャーナリストは締切に間に合うために行って、記事を書ける情報だけ集めたら帰って、二度とこない。一個人で行くと、自分と少年だけしか知らない、“自分の見た風景＝少年が見た風景”という、ある意味危険ではあるけど、ちょっとしたタイムトリップのような感覚があるかもしれません。そこをあとにする時、もとの社会にやっと戻ってこれた、みたいな。その時間だけは、犯人と一緒に過ごした、密閉された時間、っていう空気感は、現場に行くとありますよね。社会が知らない世界へ、自分だけが入りこんじゃって。不思議の国に入って、もしかして出られないかもっていう危険な感じがある。

井上：そうですね。だから私はいつも、すごくこの場所から離れるのが、最後はいやになってしまう。ここにいると、なんか自分も生きているんだっていうのをすごく感じます。それと、写真によって私自身「時代や社会がこのような猟奇的な殺人を作り出しているのではないか？」という疑問をぶつけながら、ある意味社会参加しているんだという満足感も少しはありますね。

●怖いけど聞いてみたい

小林：この応募作品には、写真と一緒に文章があるけど、少年の犯行声明文の引用だと思うけど、ここに載せたってことは、この言葉にひきつけられた何かがあったんですか？

井上：すごいなって。ひと言ひと言に込められた思いっていうのが、強烈で怖いけれど、とても悲しいというか。

小林：写真展で多くの人に見せる時、作家の姿勢ってかなり重要だと思うんです。すごいデリケートなテーマで、共感していますっていうと、非難されるし。でも、井上さんぐらいの世代にとっては、その世代の気分が何かあるかもしれない。そのへんの自分なりの、写真展での方向性っていうのは、どんなふうに考えてやろうとしているんですか？

井上：私が考えていたのは、文字を小さくして、この文章を入れようと思っていたんです。でも苦情とか、きた場合とか考えると……。写真展での方向性としては、この種の犯罪を絶対に阻止しなければならないという願いを込めてですね。

小林：井上さんの中で、これが私の主張っていう、世界へこれを問いたい、ということなら、僕はこれはこれでいいと思う。周りの反対を押し切って、これだけ貫いて撮っているから。ただ現実的には、すごいデリケートなことで、少年の言葉は、うーん、ちょっと難しいですよね。井上さんにとって、切り離せないテーマと写真っていうことが、見る人に伝われば一番だけど、この文章は強烈すぎる……。

事務局：妙に誤解されてしまうのが、一番寂しいですね。周りの人に白い目で見られながら撮り続ける、そこまでする行為の背景には、事件を自分に引き寄せて真剣に事件と向き合いたい、という思いがあるんだけど、このテキストからはそうは感じられません。少年のように、世の中を挑発しているかのように誤解されやすい。

小林：そうですね、興味本位で撮ったんじゃないかって。ある意味すごい危険なテーマでもあるんですけど、貴重なテーマでもありますよね。誰でも出来るわけじゃない。でも、誤解されたくないですよね。誤解されちゃうと、これからいろいろ撮っていく上で、自分のためにならないような気がするんで。

井上：はい。展示でどうするか……、考えてみます。それから誤解されないよう説明させて頂きます。

事務局：井上さんの感じている、激情は人間誰しも持っていて、自分も同じ罪を犯すかもしれない、という恐怖感、その恐怖っていうのは、撮っている間は、膨れ上がっていくんですか？　それとも情報を得て、分かれば分かるほど、自分は罪を犯さないかもしれないっていう、そういう安堵感になっているんでしょうか？

井上：写真を撮っている間は、恐怖はたしかにあります。だけど現場を離れると、自分は決して罪を犯さない人間であるってことがよくわかるんです。次元を異にした「激情」が私たちの心の奥底にあると言います。風のように嵐のように不意に現れ見舞って消えていく激情、レナード・ウルフはこの「激情」は誰しもが持っているといいます。私もその一人だということです。

小林：多分、井上さんみたいに思っている世代っていっぱいいると思う。井上さんは、写真っていう表現があって、ある意味では客観的に見られて、表現できていると思うんですけど、同じ世代で、そう思っていても気づいていない人って大勢いると思う。写真展の時も、少年と同世代の人がどう見るのかな、どう思うのかなっていうのが、すごい興味があるんです。

井上：見てくれた人の感想も聞きたいんだけど、恐い部分もあって聞けない自分もいる。でもやっぱり聞いてみたい。

小林：それにしても、事件写真としては、これまで見たことのない写真ですよね。事件写真って、モノクロで、空とかすごいアンダーに焼いて、なんか、事件の負のオーラが詰まっているような感じがする写真が結構多いんですけど、これは逆ですよね。今も撮っているんだよね、それはさらに、いろんな現場に行ってみたいっていうことですか？

井上：現場は大体同じところなんですけど、今度はシャボン玉ではなく、また本質に戻ってシャボン玉の力を借りずに、表現してみたいと思っています。

２００５年５月１０日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）